

聖書:ルカの福音書2章41～52節

説教:どうしてわたしを捜すのか

はじめに

この所を読んで皆さんは、こんな疑問を持たれたのではないか。どうしてイエスは親に何も告げないでエルサレムにとどまったのか。叱るマリアに対しイエスが答えるのですが、そのことばにマリアも私たちも戸惑います。まだ十二歳のこどもがこんなことをしたり言ったりするのか。特別な才能を持った子どもを「ギフテッド」と呼ぶそうですが、ギフテッドなこどもを育てるマリアの苦勞も並大抵ではありません。なぜイエスはこのようなことをしたのか。イエスは何を言おうとしたのか。ともに考えてまいります。

1 過越の祭り

過越の祭りは、イスラエルの民がエジプトから脱出したできごとに由来しています。神がエジプトのあらゆる長子を打とうとしたとき、イスラエルの人々は羊を屠った血を家の門柱に塗るようにと命令を受けます。神はその血を見て過越していき、救われると語られました。それ以来イスラエルは、新年の初めに過越の祭りするようになりました。

ガリラヤのナザレに住んでいたイエスの両親も、毎年過越の祭りのときには村の人たちと一緒にエルサレムに出かけるという習慣となっていました。こうして神殿に無事にお参りを済ませ、ナザレに帰るために一日の距離を歩いたあたりで事件が起きます。両親はイエスがいないことに気がつきます。自分の子どもがいないことに一日も気がつかなかったのはどうして、と不思議に思うかもしれません。このお宮参りが、村の人たちや親族が集まったの団体旅行であったことを思いだしてください。こういうとき大人は大人、子どもは子ども同士というようにグループをつくり、子どもグループは年長者が面倒をみるようになっていきます。イエスは子どもグループにいるものと思っていたので、親は気がつくのが遅れてしまいました。両親があわててエルサレムに戻ってみると、イエスが教師たちの真ん中に座って難しい議論をしている。これを見てマリアは驚きながらこう言います。48節。「どうしてこんなことをしたのですか。見なさい。お父さんも私も、心配してあなたを捜していたのです。」マリアは親として当然のようにイエスを叱ります。

2 宮の中で

1) どうしてわたしを捜すのか

ところがイエスはなんと叫んだか。49節。「どうしてわたしを捜されたのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当然であることを、ご存じなかったのですか。」謝るどころか、まるで開き直ったかのように質問で切り返してくる。イエスが言われるように、神殿は特別な場所であることはそのとおりで、イエスは神のひとり子です。しかしそうであっても、親を心配させるようなことをしてよいという理由にはならないでしょう。まして、心配して戻って来た親に向かって口答えするなどもつてのほかです。51節に「ナザレに帰って両親に仕えられた」とありますが、少なくともこの場面ではイエスは両親に仕えているようには見えません。イエスが、自分は特別な存在だからなにをしても赦されると思っていたのでしょうか。そんなことはない。なにか深い理由があるはずで

2) マリアは心に留めておいた

そのことを考える前に、マリアとヨセフのことを見ておきましょう。まずマリアです。51節後半にこうある。「母はこれらのことをみな、心に留めておいた。」これと同じような表現が2章19節にもあります。羊飼いたちが飼葉桶で寝ているイエスを捜し当ててやってきたとき、彼らは御使いが語ったことを教えてくれました。「今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。」マリアはこれらのことを心に納めて、思い巡らしていた。あれから十二年経ち、マリアはこんどはイエスが語ったことを心に留めていくのです。イエスが救い主となることをことばの知識として聞いたとしても、それがどんな意味なのかを理解していくのには時間がかかるのです。御使いが語ったことばも、今回の事件でイエスが語ったことばも理解できないままです。マリアはそれでも、わからないことをわからないとしながら、すぐに答えを見つけようとあわてるのではなく、またあきらめるいうのでもなく、ずっと心に留めていきます。祈り続けたと言うことです。マリアの素晴らしいところはそこにあります。もっともよいときに神は教えてくださると信じ、真理が明らかにされる日を待ち続けるのです。

世の中は、すぐに答えを見つけることを優れたことのように言います。けれども信仰についてはまったくあてはまらない。じっくりと腰を据えて、真理が明らかになるまで待ち続ける。それが信仰だと思うのです。私たちはもっとマリアを見習うべきではないでしょうか。

3) ヨセフは表に出てこない

ではヨセフはどうでしょうか。みなさん気づいていらっしゃるかもしれませんが、マリアは存在感があるのですが、ヨセフの影が薄い印象がある。48節でマリアが「あなたのお父さんも」と言っているのに、ヨセフがそばにいることは間違いない。子どもが悪いことをしたら父親がしかるべきなのにヨセフは何も言いません。マリアがイエスを叱るところがクローズアップされて不思議な印象があります。そのことはまた最後に触れましょう。

4) 救い主の意味

さて、49節のイエスのことばはどのような意味だったのか。そのことを考えていきます。繰り返しくになります。十二年前にイエスがお生まれになったとき、マリアは羊飼いたちを通して御使いが告げたことばを聞いていました。「今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。」ことばとしては意味はわかるのですが、いったいどのようにして救い主になれるのか、救い主が何をしてくださるのか、この時点ではいっさいにもわかっていません。では、マリアは御使いが語ったことばをいつ理解したのでしょうか。イエスが十字架で死なれ、三日目によみがえられたのを見たときではないですか。マリアが自分の目ですべてを目撃したとき、私たちのために救い主はどのようなことをしてくださるのか、それまでずっとわからなかったことが、まるでパズルのピースがぴたりとおさまるように理解していった。であれば今日の箇所も、イエスの十字架の死と復活という視点から見たらどうなるのでしょうか。

3 イエス

1) いなくなる：死

子どもを育てたことのある親であればおわかりいただけるでしょう。イエスが行方不明になったとき、もしかしてイエスは事故にあって死んだのではないか。そんな最悪なことをマリアは思い浮かべたはず。実際はそうではなかったわけです。

が、心の中ではイエスは死に最も近いところにいたことになる。このことを十字架という視点から見てください。十二歳のイエスは、ご自分がやがて十字架で死ぬことをまだぼんやりとではあるけれどマリアに教えていたことになるのではないかと。

では、イエスが両親にエルサレムにとどまることを告げなかったのはなぜか。変な言い方に聞こえるかもしれませんが、イエスはご自分が死ぬために誰かの許可をもらう必要があるのでしょうか。ありません。イエスご自身がご自分で決めることであり、マリアも私たちも一切手出しをしてはいけません。そういう場所なのです。だから両親には告げなかった。

2) 三日目に見つかる：復活

イエスが突然のように行方不明になったことが十字架の死を表すのであれば、イエスを宮の中で見つけたことはどんな意味になるか。46節にあります。「三日後になって。」これが鍵となることばです。これは偶然ではありません。十字架でのちをお捨てになったイエスが、死からよみがえられることを、「三日後」ということばをとおしてあらかじめ告げていた。このときのマリアにはわかりません。けれども、やがてよみがえられたイエスに出会ったとき、御使いが語ったことば、イエスが十二歳の時に語ったことばのすべての意味がわかりました。

この出来事が起きたのは過越の祭りのときでした。およそ20年後、イエスは同じ過越の祭りのときに十字架におかかりになります。十二歳の子どもが、十字架の予告をするのです。私たちを罪から救うために、神がどれほどの熱心さで十字架の救いを与えようとしておられたのか、改めて覚えたいと思います。

3) 父の家にいるのは当然である：信仰告白

最後に考えます。ヨセフの影が薄いのはなぜか。48節でマリアはヨセフのことを「お父さんも」と言っています。原語に忠実に訳すと「あなたのお父さんも」となります。これに対してイエスは49節で「自分の父」と言います。父なる神を指しています。マリアは、イエスがエルサレムにとどまっていたことが十字架につながっていることをまったく理解していません。それで「あなたのお父さんヨセフも」と言います。それに対しイエスは、ご自分の十字架を見つめながら、「わたしが自分の父の家にいるのは当然である」と言います。自分は、いの

ちを捨ててよみにまで降るけれど、天の父なる神が自分を死からよみがえらせてくださる。そのことを堅く信じているという信仰告白です。このできごとの中心におられるのは天の父なる神なのです。イエスは父なる神の御栄光を現すことに心を砕いています。十字架の死と復活のみわざは、父なる神に対するイエス・キリストとの信仰が度台にあったことが浮かび上がるのです。

私たちは信仰の創始者であるイエス・キリストから目を離さず、信じ続ける者でありたいと願います。十字架の救いの恵みがどれほど深い神のご計画によるものであったのかを覚え、御名をあがめます。